令和8年度
広島平和記念式典
派遣事業
感　想　文



磐　田　市

《目次》

使命　磐田第一中学校　鈴木　夕葵　…1
広島で学んだ平和　磐田第一中学校　佐野　羽琉飛…1
八月六日を未来へツナグ　城山中学校　平野　愛依　…2
平和とは　城山中学校　渡辺　朔　…3
平和の方が楽しいよ　向陽中学校　片岡　真琉子…3
広島で本当にあったこと　向陽中学校　室谷　江蓮　…4
平和を願う私たち　神明中学校　村越　美桜　…5
平和のために、私ができること　神明中学校　濱田　紗衣　…6
広島で学んだこと　南部中学校　松山　彩佳　…6
原爆の恐ろしさと平和の大切さ　南部中学校　石井　絢太　…7
わたしたちがつないでいく　福田中学校　水谷　緒帆　…8
僕の見た景色　福田中学校　小柳　慶志郎…8
平和への思い　竜洋中学校　石原　蒼空　…9
今ある平和の尊さ　竜洋中学校　服部　咲希　…9
私たちが平和をつなぐ　豊田中学校　池谷　心葉　…10
本当の平和　豊田中学校　新井　蓮　…11
当たり前の日常を守るために　豊田南中学校　阿部　眞士　…11
本当の平和とは　豊田南中学校　平出　琴葉　…12
強く決めた私の決意　豊岡中学校　猪原　千愛　…13
青年の言葉　豊岡中学校　大西　香歩　…13
誰もが幸せであるために　磐田東中学校　鈴木　華綾　…14
たった一発の原子爆弾で　磐田東中学校　飯田　礼花　…15

（凡　例）

・本書は、令和八年度広島平和記念式典派遣事業の参加者の感想文をまとめたものです。

・誤字・脱字などを除き、原文のままで掲載しています。

使命

磐田第一中学校　３年　鈴木　夕葵

私たちは、原爆を知らない。

原爆が投下されてから、八十一年。現在、被爆者の平均年齢は八十六歳を超え、人口は十万人をきった。その中で、私たちは被爆体験を直接聞ける最後の世代として、未来に託さなければならない。

私は被爆者の方の講話や平和記念公園の説明を聴いて、今あるこの世界が、どれほどのものを失って造られたのかを身をもって感じた。原爆は、当時そこにあったもの、そこで過ごしていた人の記憶、物語、すべて一瞬にして奪い去り、跡形もなく消し去った。

ガイドの方から、「この公園は、盛り土をして作られた。だから、もしかしたら一メートル下の地面には取り除かれておらず、残っているものが出てくるかもしれない。」ということを聴いた。そんな地面を歩いているというこの現状から、私は怖いと感じる前に、当時の背景が浮かんだ。遠いと感じていた悲劇が決して遠いものではなく、今日まで私たちに平和について考えるきっかけを与えてくれているのだ。

被爆者の方も、当時の記憶を思い出したくなかったと語っていた。でも、この現状から目をそらさず向き合っていくことで変えられることがあるかもしれない。そんな思いから今、私たちに伝わり、当たり前の尊さを感じることができている。

次の世代に伝えるために行動してくれている人がいる。その思いに応えるために私たちもできることがあるのではないか。行動することと同じくらい、平和について考え、思いを深めることが大切だ。一人ひとりの思いは小さくても、みんなで繋ぎ、広げれば、必ず大きな思いとなり、新たな見方をすることができる。これが、私たちの使命だ。

広島で学んだ平和

磐田第一中学校　２年　佐野　羽琉飛

私は広島へ行く前、平和とは「みんなが楽しく過ごせること」だと思っていました。友達と話したり、一緒に笑ったり、安心して毎日を過ごせることが平和なんだと思っていました。広島に行って、原爆ドームを実際に見たり、平和記念資料館を見学したり、被爆者の方のお話を聞いたりしました。原爆ドームは、今まで写真や教科書で見たことがありました。でも、実際に目の前で見ると、原爆が本当にここで起きたことなんだと感じました。写真で見るのでは、感じ方が全然違いました。平和記念資料館では、一つ一つの写真を見たり、原爆によってボロボロになった服や自転車など、実際に残っている物を見たりしました。特に使われていた物が今も残っていることが印象に残りました。原爆によって、普通に生活していた人たちの毎日が変わってしまったことを考えると私も辛いし、悲しい気持ちになりました。そして、被爆者の方か

ら直接お話を聞くこともできました。私は特に「辛い」や「悲しい」を何度もくり返して発していたことに印象が残っています。それだけ大きな苦しみを経験したことが感じられました。お話を聞いたことで、知れたことが原爆についてだけでなく、被爆者の方の気持ちを知り、より深く私の中で考えることができました。広島へ行く前の考えに追加し、色々なことを聞いて、学んで、過去に起きたことを知って、次世代へ伝えていくことも大切だと気づくことができました。広島へ行かなかったら、このような気持ちや考え方ができなかったと思います。私は、今回学んだことや感じたことを忘れず、家族、友達にそして学校のみんなにも伝えていきたいです。普段の生活でも、相手の気持ちや考えを理解し、平和にしようとする気持ちを心がけたいと思います。私はこれからも平和について興味を持ち、考え続けていきたいです。

八月六日を未来へツナグ

城山中学校　３年　平野　愛依

私は、八月五日、六日に広島平和記念式典派遣団の一員として広島を訪れ、戦争の恐ろしさ、平和の尊さについて学びました。貴重な経験の中、特に心に残ってたものは、被爆者である河野キヨ美さんの被爆体験講和、平和記念式典への参列です。

河野さんは、爆心地から約三十五キロ離れた場所で、当時十四歳で被爆し、働きに出ていた姉を探しに広島市街を訪れました。広島市街では、多くの遺体が横たわり、特に元安川には山のように遺体が浮いていたといいます。倒れている遺体の多くは、お腹が潰れ、内臓が飛び出し、見られるものではなかったそうです。河野さんの講話からは、もうこのようなことが二度と起こってはいけないという強い思いが感じられました。

平和記念式典には、約百二十四の国が参列していました。世界中から集まったたくさんの人々の真剣な表情を見て、平和を願う気持ちに国境はないと深く実感しました。そうした中で、子ども代表による「平和とは、誰かからあたえられるものでなく、世界中の人々で創り上げるものです。」という言葉が印象に残っています。誰かが平和な世界を創ってくれると思うのではなく、一人ひとりが平和について考え、行動していくことが大切だと気付かされました。学校で友達と笑い合ったり、家族との時間を楽しんだり、何気ない日々の一日一日に価値があり、守る必要があると痛感しました。

そして、私たち子どもは、被爆体験を直接聞くことができる最後の世代です。このバトンを受け取った者として、このような悲惨さから目をそらさず、後世に伝え続ける使命があります。平和について学んだ私たちが先頭に立ち、未来を生きる人々へ平和を守ることの大切さを伝えていきたいです。

平和とは

城山中学校　２年　渡辺　朔

一九四五年八月六日のあの悲しい出来事は、決して忘れてはならない大切な事だと思います。僕は広島平和記念式典派遣事業に参加し、戦争や原爆に関する資料の見学や、実体験の講話の聴講、平和記念式典への参列などを体験しました。その体験を通して、平和とは何かについて考え直しました。

安田女子中学高等学校には、数少ない被爆桜があり、生徒の皆さんは、その桜の苗木を学校や団体に送る活動をしているそうです。実際にその桜に触らせてもらった時、その桜から、戦時中の広島の風景やそばで必死に生きていた人々の思いや苦労が伝わってきました。被爆し八十年経った今でも、春に花を咲かせる生命力あふれる被爆桜から、これからも平和について考えながら生きてほしいという願いが伝わってきました。

全国こども平和サミットでは、実際に被爆してしまった方や国連職員の方の話、平和への取組を行った方たちの発表などを聞きました。被爆者である河野キヨ美さんの講話では、河野さんが体験した当時の生活状況や原爆投下後の広島についてリアルに話してくれました。焼け野原となった広島の景色を考えるだけで、心が痛みました。プログラムの最後には、自分と同世代の人たちが、平和について考えや思いを発表していました。その中でも、発表者たちの「自分が考える平和」「本当の平和」についての考えが印象に残っています。

そこで僕も「自分が考えられる平和」とは何か考えました。僕はこの事業に参加する以前、平和とは戦争がないということだと考えていました。ですが、事業でさまざまな事を学習した後の今は違います。今は、平和とは互いに認め合い、共存できることだと考えています。だから僕はこれから、学校や家庭でいじめや喧嘩のない平和な環境を自らつくりあげていきます。

平和の方が楽しいよ

向陽中学校　３年　片岡　真琉子

「今日の空は青くて、晴れてるな。」

「暑いから学校めんどくさい。」

私は、朝目覚める度に、毎日同じようなくだらないことを思って過ごしていた。今の日本や今の私は「平和」だと思っていた。服を着て、家族と朝ご飯を食べて、自転車に乗り友達と会う。あまりにも普通。

夏休みが始まり、広島に行った。私は、ただ悲しい過去を見に行く、そんな気持ちで新幹線へ乗り込んだ。安田女子中学高等学校への訪問、原爆ドーム、資料館、平和記念式典や全国こども平和サミット。ただ悲しいだけじゃなかったんだ。私はすべての訪問先で一番感じた疑問があった。

「平和」ってなんだろう。

私はてっきり、今が平和なんだと思いこんでいた。でも、実際には、世界でまだ平和では無い国。戦争が続く国。貧しい国。まだ「平和」と呼べる状態ではない国が幾つもある。日本の私だけが平和でも、私たちが目指す世界中でつくりあげる「平和」はまだできていないのではないか。

資料館で脳に焼き付けられた展示品のほとんどが、自転車や小さな衣類など、日常のものばかりだった。空は黒く、暑く、痛く、地獄に変わってしまった。

私は広島から帰った後、いつもの日常にもどり、小さな幸せを見つけられるようになった。友達と笑い合い、ご飯が美味しいと感じて、学校に行く。生きるはずだった全ての人が、ただ過ごしたかった未来なのかもしれない。何が起きたのかも分からないまま、一瞬で幸せが失われる恐ろしさを想像できるだろうか。

広島にいる間、平和へのメッセージでこんな文をみた。平和の方が楽しいよ。ただ純粋に楽しいと感じられる気持ちこそが、本当の「平和」なのだろう。

広島で本当にあったこと

向陽中学校　２年　室谷　江蓮

今回の広島での学習を通して、私はこれまで頭の中でしか知らなかった戦争と平和の重みを、強く実感することになった。

特に印象強かったのは、平和記念公園を案内してくれたボランティアの方の言葉だ。

「今から歩く道の下には、当時の人々の生活の痕跡がまだ埋まっているのよ。そのことを頭に入れて歩いてね。」

その言葉を聞くまでは、原爆がおとされたのは別の世界であるように感じることも少なからずあった。しかし、聞いてからは、自分の目で見た原爆ドームや資料館の資料もふまえて、今いる場所に当時の情景を重ねてみることができた。きっと当時の景色はもっと残酷で私の想像をはるかにこえるだろうが、少し想像するだけでも鳥肌が本当に止まらなかった。また、それまで平和の象徴としか考えていなかった千羽鶴。毎年折っていたのにもかかわらず、「広島に持っていくため」としかとらえていなかった。しかし、鶴には、佐々木禎子さんの話が背景にあることも知り、これからは、平和や被爆者へのご冥福を祈りながら折りたいと思った。

様々な体験を経て、私の中で「平和」に対するとらえ方が大きく変化した。これまでは「戦争が起きないこと」と漠然にとらえていたが、今では、過去の悲劇をくり返さず、一人一人が記憶を受け継ぐ。そうやってみんなで作るものだと思った。一人一人が記憶を受け継ぐその一人には自分ももちろんふくまれる。だから、周囲の人と言葉にして共有し、世界から核兵器がなくなることを祈る。

平和を願う私たち

神明中学校　３年　村越　美桜

私は、磐田市で中学生派遣団として参加させていただいた神明中学校三年生の村越美桜です。私は広島平和記念資料館に今回ふくめ、三回行きました。最初の二回は小学生のころに行き何を学んだのか、そこで何を大切にしようと思ったのかも覚えていないくらいでした。今回三回目の広島で一番印象に残っていること、学んだことを書きます。

一番印象に残っていることは、広島平和記念式典の小学生代表の発表です。なぜ印象に残ったかというと、あの空気の中緊張を表に出さず、はきはきと話す姿がとても印象に残っています。ほんとうに小学生かわからなくなりました。私だったらあの緊張の空気の中ずっと前を向いて大きな声ではきはき話せないなと思いました。尊敬しました。

次に学んだことは二つあります。

一つ目は、平和は当たり前じゃないということです。

今、家族や友達と楽しく過ごせているこの時間は当たり前じゃないということを教えていただきました。広島の原爆はたった一発、たった一瞬でなにもかもが周りからなくなりました。楽しく過ごせていた日々、友達と話せること、何気ない家族との会話、すべて、一九四五年八月六日八時十五分に失いました。考えられないほど一瞬だったと思います。私は今がすごく幸せです。家族にも恵まれていて、友達にも恵まれていて、バレーボールも楽しくできています。この幸せの日々が消えるということが考えられません。だからこそ今ある平和をかみしめてこれからも過ごしていきたいです。

二つ目は戦争の恐ろしさです。私は今までの人生で一度も戦争を経験したことがありません。だから、戦争の怖さや恐ろしさは体験した人にしかわからないことだと思います。しかし、広島に行って、平和サミットで河野キヨ美さんのお話を聞いて、戦争を身近なものだと感じました。印象に残っているお話は、地面にたくさんの死体が転がっているお話です。その死体は、体が焼けただれてしまって赤色に染まってしまって、目玉が飛び出ていて、内臓が出ていたと言っていました。それを聞いて、一言でいうと恐怖でした。私はいつの間にか涙が出ていて自分でもびっくりしました。当時の情景が一瞬で思い浮かびました。今の生活だと考えられないほど残酷なお話ばかりでした。自然と涙がでるほど自分も当時の人の気持ちを少しでも考えてお話がきけたと思いました。

私は中学生派遣団として参加させていただき、たくさんのことを学ばせていただきました。ここから学んだことを家族や学校、それ以外でも平和の大切さを全国に広めていきたいです。

平和のために、私ができること

神明中学校　２年　濱田　紗衣

この広島平和記念式典派遣事業を通して私は、広島の原爆の出来事を自分ごととして考えられるようになりました。特にそのきっかけになり、心に残っているのは、広島平和式典での子どもによる平和への誓いです。広島市の子ども代表の方が平和の尊さと今私たちにできることを語っていました。「平和とは誰かから与えられるものではなく、世界中の人々で作り上げるもの。」「悲しい現実でも、目をそらさず知ろうとすること。」

この二つの言葉を聞いて私は、原爆投下を昔の出来事で終わりにせず、自分が生きている日本で起きたあってはならない出来事、今でも戦争で苦しい思いをしている人がいることを理解し、平和を願うことが大切だと感じました。そして、より多くの人に、この現実を知ってもらい、平和について考えてもらうために、派遣事業に参加した私が、実際に目で見て感じたこと、考えたことをこれからも地域や学校で伝えていく必要があると感じました。この経験を活かし、私はこれからも平和を願い、どうしたら平和に近づくのかを考え、平和のために自分にできることを行っていきたいです。

広島で学んだこと

磐田市立南部中学校３年　松山　彩佳

広島・戦争・原爆について、これまで教科書などで学んできた。しかし知識として知っているだけで、どこか遠い世界の話だと感じていた。

広島では安田女子校で被爆桜や被爆黒松について学び、平和記念公園や資料館ではボランティアガイドの方からお話を聞いた。

特に心に残ったのは、原爆資料館で見た子どもたちの服だ。焦げて破れた小さな服を見て、原爆が落ちるその瞬間まで、この子たちも私たちと同じように学校に行き、家族と過ごしていたのだと思った。それなのに、その日常が一瞬で奪われてしまった。写真や人々の言葉を見て、遠い世界の出来事だと思っていたことがわずか８１年前にここ広島で実際に起きたことなのだと実感した。

さらに被爆された方からも直接お話を聞いた。今の私たちと同じくらいの年齢の子どもたちが、当時は食べ物をはじめ何もかも十分にないにもかかわらず「欲しがりません勝つまでは」と教えられ、我慢を強いられた。夢や希望を叶えるどころか、それを願うことさえ難しい時代だったことが強く印象に残った。私たちと同じように友達と笑い、将来に夢を持っていたはずなのに、その日常も未来も奪われた。戦争がなければ、原爆がなければ、この子たちはどんな未来を歩んでいたのだろう？そう考えると、戦争が急に身近なものに感じ

られ、決して他人事ではなくなった。
　実際に見たり聞いたりしたことで、これまで聞いてきた戦争についても改めて考えるようになった。どの話も似ているように感じていたが、それはあまりにも悲惨で、言葉では表しきれないことだったからこそ、そう表現するしかなかったのではないか？と感じた。
　これからの未来を作っていくのは私たちだ。誰にでも苦手な人や、できれば側にいてほしくない人はいる。でも、その人も誰かにとっては大切な人なのだ。相手のことを少し想像できれば、人は今より少し優しくなれるのではないか。広島で感じたこと、学んだことを忘れず、自分にできることから一歩ずつ始めて行きたい。
　貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

原爆の恐ろしさと平和の大切さ

南部中学校　２年　石井　絢太

　僕は広島に行き、原爆の恐ろしさと平和の大切さについて学びました。１９４５年８月６日午前８時１５分、たった一発の原子爆弾が広島を焼け野原にし、原子爆弾が落された後も放射線による病気で広島の人々を苦しめました。だから僕は、原子爆弾を二度と使ってはいけないし、このようなことが二度と起こらないようにしていかなければならないと思いました。そのようなことが起こった広島に勇気を与えたのは植物でした。安田女子中学高等学校では被爆した桜を次の世代に残すために被爆桜の苗木を全国に送る活動をしています。被爆桜は磐田市の四つの学校にしかありません。そこで僕は、被爆桜が磐田市の全ての学校に植えることができればいいなと思っています。
　僕が広島に行って一番印象に残ったことは平和祈念式の子ども代表の平和の誓いです。僕は平和の誓いで被爆者の話を直接聞ける最後の世代ということを聞いてとても驚きました。だから僕は被爆者の話をしっかり次の世代へ受け継いでいきたいと思いました。僕たちにできることは広島に原爆が投下された事実から逃げずに、そのような出来事があったことを忘れないこと、広島に原爆が落されたことを次の世代に伝えることだと思っています。
　僕は広島に行く前と行った後で平和の考え方が変わりました。広島に行く前は戦争がないことだけが平和だと思っていましたが国連事務次長の話を聞き平和への考え方が変わりました。僕の平和とは戦争がなく誰にも心に傷が入らないことだと考えました。平和は一人では成り立ちません。だからみんなで協力することが大切だと僕は思っています。僕は平和を作るために必要なことは相手の気持ちを考えることだと思いました。相手の気持ちを考えることで争いが起きないと思います。

わたしたちがつないでいく

福田中学校　３年　水谷　緒帆

「平和とは、誰かからあたえられるものではなく、世界中の人々で創り上げるものです。」これは、八月六日、広島で行われた平和記念式典の中での子ども代表の平和への誓いの中でのある一文だ。私はこの言葉に胸を打たれた。

私は八月五日と六日に広島平和記念式典派遣事業で広島を訪れました。ここで感じたことは「平和を創り上げることは年齢は関係ない。」ということだ。一日目に訪れた安田女子高等学校では被爆桜を通した磐田市との交流についての話を聞いた。この交流は派遣事業にて偶然お話をした高校生がきっかけだと知り驚いた。またその後訪れた平和記念公園でボランティアの方から色々話を聞いた。原爆ドームが残されたのは一歳で被爆し、十五年後白血病で亡くなった楮山ヒロ子さんの日記がきっかけになったそうだ。「あの痛々しい産業奨励館だけが、いつまでも恐るべき原爆を世に訴えてくれるだろう。」日記に遺こされたこの言葉が多くの子どもの心を動かした。そしてその子どもたちは全国で署名や募金活動を展開した。原爆ドームが今、「負の世界遺産」として人類への戒めとなっているのは子どもたちによる活動がきっかけだったのだ。

子どもたちが平和を創り上げるために行っていたことを聞いて私も何かできることはないか、と家に帰ってから考えた。大人を動かすような大きいことはできない。でもこの派遣事業で見たこと、感じたことを伝えることはできる。平和記念資料館で感じた戦争の恐怖。被爆者から聞いた平和への願い。これらを周りの友達、家族に伝えることが私の役目だ。この小さいことのつみ重ねが平和を創る第一歩なのかもしれない。

私は決意した。祈るだけはもうやめよう。私は伝え続ける。自分の言葉で。平和への想いを。そしてそれを次の世代へ繋げたい。

僕の見た景色

福田中学校　２年　小柳　慶志郎

今回、広島へ行き、平和について深く考える貴重な経験をすることができました。

特に印象に残ったのは、被爆された方々のお話や、平和を願う人々の姿です。直接話を聞くことで、教科書などで学ぶだけでは、感じることのできない重みを感じました。戦争によって多くの人が苦しみ、当たり前だった日常が一瞬にして失われてしまうことを改めて知り、戦争は絶対にしてはいけないことだと強く思いました。そして苦しく、悲しい気持ちになりました。

自分は広島に行く前、戦争は遠い昔の出来事だと思っていました。しかし、被爆者の人々の話、原爆ドーム、平和記念式典を目の前にしたとき、自分事として考えるようになりました。戦争を過去として忘れず、戦争があったという事実や

平和についてを周りの人、そして後世に伝えていきたいと思いました。

平和への思い

竜洋中学校　３年　石原　蒼空

八月五日に私は広島平和式典派遣事業へ参加し広島県へ行きました。広島平和記念資料館を見学したり平和式典へ参加したりしました。八十年前に落とされたとされる原子爆弾は私が想像していたよりも被害が大きく、残酷なものでした。大勢の人々の命が失われ、放射線により後遺症に苦しまれる人々が今でも残っています。私は本当に衝撃を受けました。このようなものが現在もこの世に存在しているのかと絶望し、とても核を恐れました。私は二度と核を作るべきではないと考えます。しかし、私の考えとは裏腹に他国では大量に核が生産され、今にでも戦争に核が導入されそうです。核が世界各地へ落されると確実にこの世は滅びます。それほどの力を核は持っています。大切な家族も友人も、温かい生まれ育った環境や思い出の場所も何もかもなかったことにされ、尊い命が大量に奪われる。こんな世の中は私が思い描いている平和な世界ではありません。なので普段の生活から自分にできることを考え、実践しようと考えました。例えば、人種差別や偏見をなくすために普段の生活の中で相手の意見を尊重し、文化や伝統を受け入れ、誰にでも平等に接して信頼関係を築きたいです。

私は広島へ派遣されてから考え方が大きく変化し、今生きている時間の価値に気づくことができました。大切な人と過ごす貴重で価値のある時間を誰であっても奪われるべきではないです。いずれ別れが来ることは生命の宿命であり、逃れられない運命であることはわかっています。だからこそ大切な人と何気ない時を過ごす時間だけは他人の手によって奪われてほしくないと思いました。なので私は家族と過ごす何気ない時間を大切にしていきます。本当に広島平和記念式典派遣事業に参加してよかったと、心から感じました。

今ある平和の尊さ

竜洋中学校　２年　服部　咲希

私は今回の派遣事業を通して、平和についての考え方が大きく変化しました。

派遣事業に参加する前は、争いや言い合いがないことが平和だと思っていました。しかし、派遣事業に参加した後は、一人ひとりの意見が尊重され、一人ひとりの自由が守られている状況が続いていくことこそが平和なんだと思いました。

私はこの二日間で、戦争や原爆の悲惨さや恐ろしさについてたくさん学びました。資料館に行ってたくさんの資料を読

んだり、平和記念公園に行ってガイドさんの説明を聞いたりした中で、私が特に心に残っているのは、二日目の、「第二回全国こども平和サミット」に参加した際に、原爆の被爆者である、河野キヨ美さんのお話を聞いたことです。

河野さんは、自身の目で見た情景、自身が感じた戦争、原爆の恐ろしさを、一つひとつ丁寧に教えてくださいました。私は河野さんの話を聞いて、争いのない今がどれだけ尊く、どれだけ恵まれているのかを改めて強く実感すると共に、戦争や争いがどれだけ人々に悪影響を与えていたのかを考えさせられました。

今回の派遣事業では、学校では習うことのできないことや、行ってみないと感じられないことがたくさんありました。この二日間は、戦争や原爆の恐ろしさ、平和の尊さへの考えを深めるとても良い経験になったと思います。この二日間で学んだこと、感じたことを決して忘れてはならないこととして、家族や友達など、たくさんの人に発信していきたいです。

私たちが平和をつなぐ

豊田中学校　３年　池谷　心葉

現在、世界各地で戦争がやまない中、被団協の方々の思いは本当に世界に伝わっているのでしょうか。

私は派遣授業で最初に訪れた安田女子高等学校で被爆桜を見ました。その被爆桜は原爆にあってもなお、生き続け、今も生徒を見守っている姿と、幹の太さに、生きる力強さを感じました。また、午後に訪れた平和記念公園では被爆体験伝承者の方から空爆についてその方が知る限りのことを教えてくださいました。数多くのお話の中で一番印象に残っているのは、「今では平和を学ぶ観光地として世界でも注目されている平和記念公園の地下には原爆によってなくなった人たちの骨がうめられている」ことです。あの日、私が実際にその場に立ち、「何も悪くない人たちの命がたった一発の原爆によって失われてしまった」という事実を簡単に受け入れることはできませんでした。しかし、平和を繋いでいくためには、この事実を受け入れ、学んだことをたくさんの人に伝える必要があり、そして同時に、私たちは「今ある平和のシンボル」を守り続けなければなりません。世界遺産に登録されている原爆ドームに世界遺産の方々はいつ訪れるか分からないため、いつ来ても登録してもらえるよう、毎日の掃除は欠かせないそうです。そんな原爆ドームをきれいに保つことは平和を保つことだと感じました。

二日目には、広島の平和記念式典に参加しました。参加して私は「平和について世界中の人々が世代を超えて、国境を越えて考えている。今こそ、戦争を止めるべきだ。世界平和を訴えるべきだ」と考えました。現在、私たちが一九四五年以来、戦争もなく平和に生活できているのはこの時の広島の

出来事があったからです。昔の人達がつないできてくれている「平和」に感謝し、みんなで平和をつないでいきたいです。

本当の平和

豊田中学校　２年　新井　蓮

私は今回の広島派遣事業に参加して、とても印象深かったことがいくつかあります。

一つめは、式典での小学生による平和の誓いです。その中で、「平和とは誰かから与えられるものではなく、世界中で作り上げるもの」という言葉がありました。私はこれを聞いて、ハッとしました。今までまわりにある平和を当たり前として、平和を自分事として捉えていなかった自分に気づかされました。一人ひとりが平和について考えることが平和への一番の近道だということを改めて考えさせられました。

二つめは安田女子校で見た被爆桜です。この被爆桜は広島が悲惨なときも、苦しいときもそびえ立ち、街の人たちの誇りとして生き続けてきました。そんな被爆桜を見せていただき、命の尊さや寛大さ、そして勇ましさを肌で感じることができました。今でもその光景が目にやきつき、心が震えます。

また、国連の方や体験された方のお話をうかがう中で、戦争が与える傷の深さは計り知れなく、永遠に癒えることがないものであることを自分の目や耳で感じる機会になりました。その中で、今、私たちができることを改めて考え、本当の平和に向き合う責任の重さを強く感じました。

今回、このような貴重な経験をさせていただき、とても学びの深い時間となりました。この思いを自分だけのものにせず、自分の言葉で一人でも多くの人に伝えていきたいと思います。この積み重ねがみんなで作り上げていく本当の平和の実現につながっていくと信じています。

当たり前の日常を守るために

豊田南中学校　３年　阿部　眞士

「今もどこかで当たり前の日常が奪われています。」この言葉は子供代表の小学生が話した言葉だ。僕はこの言葉を聞いて、平和を世界中の人々で実現しなければならないと感じた。

僕たちは八月五日と六日に磐田市の代表として広島を訪れた。この二日間の中で印象に残ったことは二つある。

一つ目は、一日目に平和公園を案内してくれたガイドさんの話だ。僕は、広島の原爆のことについて、ほとんど知らなかった。ガイドさんから、広島の平和記念公園は今でも約７万人のご遺体が埋まっていることを教えてもらった。僕は、たった一つの原爆の恐ろしさを感じた。そして、平和公園の中には「生きたかった人々」の思いも埋まっていると感じた。

二つ目は、二日目に参加した平和式典の平和宣言と平和へ

の誓いだ。広島市長の平和宣言では、「ヒロシマの心」の話が印象に残った。僕は身近なことから争いのない世界を作るためにはどうしたらいいかを考えていくべきだと感じた。平和への誓いでは小学生が「ヒロシマの心」を訴えていた。「当たり前の日常」は今も奪われ続けている。平和は実現していない。年齢など関係なく、子どもでもできることはたくさんあるはずだ。そして、平和のためにできることは何か考えるきっかけになったと思う。

この広島派遣事業で、世界中の人々の「当たり前の日常」を守らなければならないと感じた。そのために価値観の異なる人々と、「ヒロシマの心」を共有していこうと思う。

僕たちは被爆体験を聞くことのできる最後の世代だ。僕たちはこの出来事を未来へ伝えなければいけない。戦争、核兵器をなくすために、「当たり前の日常」を守り続けていくために。

本当の平和とは

豊田南中学校　２年　平出　琴葉

私は、「原爆とは何か、平和とは何なのか」という問いを胸に今回の広島派遣に参加しました。

特に心に残っているのは、資料館です。中は薄暗く、たくさんの悲惨な資料で埋め尽くされていました。人混みの中でも、たくさんの被爆物が鮮明に目に飛び込んできて、足を進める度に胸が一杯になりました。

被爆物である瓦やガラスの瓶などに、触れることができるようになっている場所がありました。その瓦や瓶は形が歪み、色も変色していました。それを見ると、これまで資料を見た時に感じた思いが一気に溢れてきました。私は、その瓦などに手を置いてもどうしても体が受け付けず、触り続けることが出来ませんでした。原爆の怖さを体で感じた瞬間でした。

帰ってきてから、展示物は前はもっと過激なものが多かったことや、多くの人に見てもらうため、内容を変えようかという相談があったことを知りました。私は「今のままがいい」と思いました。とても辛い内容でしたが、原爆の残酷さや怖さはその「辛さ」から感じるものだと思ったからです。

行く前、私にとって平和とは「戦争のない明るい世界」という簡潔な言葉でした。しかし、歴史に触れ、他校の仲間と深く意見を交わして見方が変わりました。幸せや正義は人それぞれ違うからこそお互いの違いを認め合い「誰もが心からの笑顔で過ごせる世界」を作ることこそが本当の平和だと、大切な交流を通して学びました。

今年からこの事業が中学生のみの参加となったのは、学んだことを次世代へつなぐ役割が期待されているからだと教わりました。私はその一員として、沢山の人に向けて原爆の恐ろしさや平和への思いを発信していこうと思います。

強く決めた私の決意

豊岡中学校　３年　猪原　千愛

私は、今回の広島平和記念式典の派遣活動を通してたくさんの知識と学びを得ることが出来ました。この活動を通して心に残った経験が二つあります。

一つ目は、平和記念公園内での経験です。実際に自分の目で目の当たりにする原爆ドームは教科書でみる以上に大きく、想像を絶するものでした。平和記念公園内を案内してくださったガイドさんのお話で心に残ったものがあります。それは、きれいに整備された公園内の下にはほりきることができなかった当時の方々の生活用品や遺骨がうまっているということです。このお話をきいたとき、私は頭が真っ白になり、足先からこみ上げてくるものがありました。そのような状態であることを胸にとめ、今ある社会へ感謝しながら公園内を歩きました。自分が思っていた以上の出来事が起きていたということを学びました。

二つ目は、二日目の子ども平和サミットでの経験です。特に印象的だったのは被爆者である河野キヨ美さんのお話です。たった一発の原子爆弾が落ちたことによる被害を思いうかべるだけでとても悲しい気持ちになります。この前まで自然できれいな街並みだった広島は焼け野原となり、足のふみ場がないほどの死体が広がっていたという現実を知りました。

私はこのような原爆による被害を受けとめた上で心にちかったことがあります。それはこれからの世の中に平和を灯し続けるということです。二度と同じことをくり返さないために核兵器を廃絶していく必要があります。過去に起こった出来事を過去として終わらせるのではなく、自分事として事実を受けとめよりよい社会を目指していく責任が私たちにあることを改めて実感しました。「競争よりも協力」、「対立よりも対話」という考えを常に心に秘め、何事にも個人を大切にそして尊重して生きていきたいと強く思いました。

青年の言葉

豊岡中学校　２年　大西　香歩

全国こども平和サミット。派遣事業の中で最後の見学先。国連事務次長の中満泉さんの言葉がこの二日間で学び感じたことを今の私と繋げてくれた。彼女は平和とは全ての人々の幸福が守られ、一人一人が自由で中心となることだと言っていた。そしてそれを実現するには様々な価値観に対応し、耳を傾ける、対話が必要だと述べた。それはまるで難しい問題の模範解答のように私を納得させ、するすると心に入ってきた。でも賛同する心とは裏腹に、一生叶えることのできそうにない目標だとも感じた。実際今世界では戦争が続いている。戦争による被害も、言葉では表せない恐怖も、どれもこの二日間で痛いほど感じた。だから軍事力に頼る政治をやめ、戦争なんてやらないでくれればいいのにと思った。しかし「一

人一人が自由で中心」な世界を話し合いや譲り合いで実現するのは気が遠くなるほど難しいことに思えて、どうしたらいいのか分からなくなった。私は、平和という不確定で実現不可能のような目標に向かって一歩踏み出せる気がしなかった。そんな私の心に特別支援学校の生徒の平和へのメッセージが刺さった。それは「平和の方が楽しい」という言葉だ。きっと私には分からない苦労や、辛く大変なこともあるだろうけど彼は笑顔で平和を望んでいた。当たり前のことだけど自分はその当たり前のために何もできていない、していなくてそれが悔しくて、未熟さを実感した。そして何もせず諦めかけていた自分が申し訳なくなって涙が溢れた。だけど平和を目指しそのために行動することで私は変わり挽回できると思った。彼の言葉のおかげで自分と向き合い、踏み出す理由は「楽しい」のためでいいと気づいた。この言葉が二日間で最も心に残った。そのことを母に話し、平和とは何か、平和のために何ができるかを一緒に考えた。

平和な世界は一人一人が少し相手を気遣い譲歩をしていく必要があると思う。そしてその大前提としてお互いがお互いを尊重し差別のない社会がある。私は、彼の言った「楽しい」を行動源に平和のために行動し、自分の言動を見直し変えていく。先陣を切って動き、皆で少しずつ自分にできることをやっていきたいと思う。彼が気づかせてくれた自分の未熟さを胸に刻み、私はこれから努力を重ねる。

誰もが幸せであるために

磐田東中学校　３年　鈴木　華綾

私が、広島記念式典派遣事業を通して思ったことは、誰もが幸せであるためには、すべての人が戦争や原爆の残酷さを知り、戦争は絶対にやってはいけないことを強く思う事が必要だということです。

そう思ったきっかけは、原爆を実際に体験した河野キヨ美さんのお話でした。キヨ美さんは爆心地から約３５㎞離れた村に住んでいましたが、原爆が落ちた時はとても大きな爆発音が聞こえたそうです。キヨ美さんは、２人のお姉さんを探しに翌日、広島へ向かいました。広島は、黒い焼け野原になっており、地面には足の踏み場も無い程死体が転がっていて、ある場所には中学生の死体が山積みにされていたと話されていました。調査によると原爆で犠牲になった方々で、一番多かったのが中学生だったそうです。自分と同じ年代の子が、たった１発の原爆で人生をうばわれてしまったことを想像するととてもショックでした。

私はそのお話を聞いて、今こうして学校に通うことができ、友達と楽しく過ごしたりできるたわいもない時間は、あって当たり前ではないと気づきました。それは本来ならば全ての人に平等にあるべきものです。でも、今もなおどこかで戦争があり、その幸せが奪われています。誰もが幸せであるためには、広島での出来事をずっと伝え続ける必要があると思います。

戦後８１年をむかえ、当時の体験を伝えられる方々も少なくなります。これからは、私のような世代も原爆の残酷さと、当時の広島の出来事を鮮明に語り、平和への願いを広めていくことが使命だと強く思いました。

たった一発の原子爆弾で

磐田東中学校　２年　飯田　礼花

一九四五年、昭和二十年、八月六日、午前八時十五分。広島に一発の原子爆弾が投下され、なんの罪もない多くの人々の命が奪われました。このたった一発の原子爆弾で、人々の豊かだった日常や環境、人生を一瞬で地獄に変えました。

被爆してボロボロになった制服、黒く焦げたお弁当箱などは、あたり前の毎日を生きていた証です。私は、広島平和記念資料館に行ってみて、被爆者の方々の手紙に込められた思いや、どれだけ原子爆弾の威力が強いか、一度その症状が出てしまったら命が少ないとよばれる死の斑点を見て、命の重みや大切さを学んできました。他にも、原爆ドームを見て教科書に載っている写真や動画とは違い、建物は私たちよりはるかに大きく、今までなにも手を加えてないのに残っていることがすごいなと感じました。

もし、この一発の原子爆弾が投下されていなかったら、被爆して無くなった一人ひとりが幸せに、そして諦めていた夢や希望に向かって歩んでいくことができたはずです。

もし今、核兵器が使用されたら世界はどうなってしまうのでしょうか。皆さんがお弁当を食べたり、家族とゆったり過ごしたりするあたり前の生活を、戦争や核兵器はあっという間に消し去ってしまいます。

「自分とは遠いし、無関係だからいいや」とは考えずに、平和な世界を実現するためにも、私は戦争や核兵器を知らない人たちに、広島でおきた出来事についてどうしたら伝えていけるのかを考え、伝える活動をしていきます。

皆さんも、核兵器について知ることのできるイベントなどに参加したり、私たちができることは何か、考えてみませんか。

※この作文の無断転載を禁止します。

令和 8 年度　広島平和記念式典派遣事業感想文

令和8年 10 月発行

発行　磐　田　市

静岡県磐田市国府台3－1
磐田市総務部総務課 総務グループ
TEL　0538-37-4803